

想定寿命を大きく超える人生

ダイヤ高齢社会研究財団 企画調査部長 森 義博



「想定寿命」は平均80年

想定寿命…耳馴染みのない言葉かと思いますが、当財団では「人生設計として想定する（希望ではない）自身の寿命」にそう名付けて、いろいろな場面で紹介しています。

私は想定寿命の短い人が多いことを気にしています。当財団が2019年に実施したアンケート調査によると、50代の回答者の想定寿命の平均は男性が79.8年、女性は80.8年でした。男女とも平均寿命（男性81.64年、女性87.74年 <令和2年簡易生命表>）より短く、特に女性は7年も下回っているのです。これで超長寿社会を生ききる準備は本当に大丈夫なのでしょう。とても心配です。（「想定寿命」についてはダイヤニュースNo.93、No.97をご参照）

何歳まで生きる覚悟ができていますか

ところで、平均寿命はあくまでも平均、しかも0歳児の平均余命です。私たちにとって肝心なのは、これから〇歳まで何割の確率で生きるかではないでしょうか（これも確率にすぎませんが）。

仮に65歳を起点にすると、80歳（想定寿命の平均）の生存率は男性が72.0%、女性は86.9%ですから、まだまだ通過点にすぎないと考えるべきでしょう（「令和2年簡易生命表」をもとに算出。以下同じ）。

20年後の85歳は男性が54.0%、女性は75.2%。女性

に比べて平均寿命が短い男性でさえ半数を超えています。25年後の90歳でも、男性は3人に1人近く（31.6%）、女性は半数以上（55.5%）です。

介護への備えはどうか

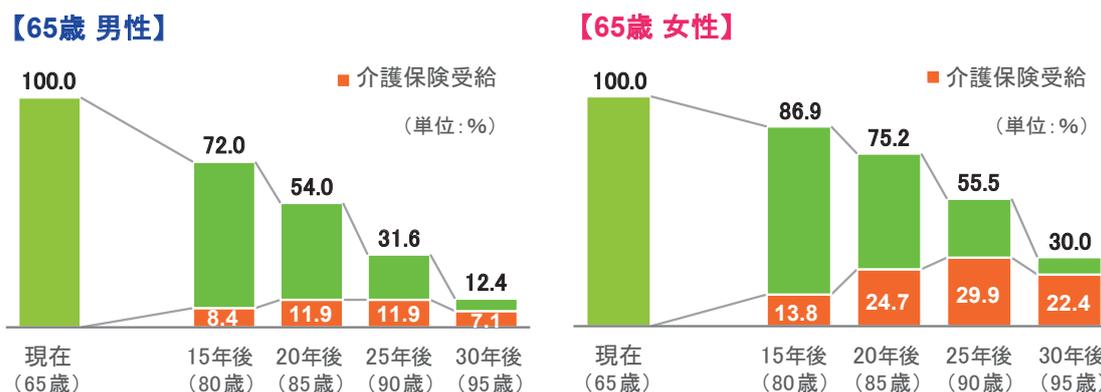
下のグラフは65歳を100とした各年齢の生存率を示しています。そして、上下に色分けした下段は、介護が必要になる率です。

厚労省の「令和元年度介護給付費等実態統計」によると、80代後半の人口のうち公的介護保険を受給している人の割合は、男性が28.7%、女性は43.4%です。90代前半では男性は46.7%、女性は64.4%に上昇しています。その割合をグラフに反映させました（※）。例えば、25年後の90歳時には女性の55.5%が生存していますが、その半数強にあたる29.9%の人が介護保険を受給しながらの生活になるということです。

長く生きる確率だけでなく、介護が必要になるリスクもしっかり受け止めることが欠かせません。そして、老後資金や住まいの準備は勿論、人間関係、さらには、自分で意思表示ができなくなる場合に備えることも大切だと考えます。

（※）80代後半と90代前半の介護保険受給率の中間の値を90歳時の値とみなし、90歳の生存率に掛け合わせた。他の年齢についても同様。

図 現在65歳の人が各年齢まで生きる確率と介護保険受給率



（出所）「令和2年簡易生命表」「令和元年度介護給付費実態統計」（厚生労働省）をもとに筆者作成